



泉丘SSHだより



第9号 H21.10.8

編集：SSH推進室

発行責任者：浅田秀雄

石川県立金沢泉丘高等学校

人間科学特別講義 「未来医療における倫理性」

金沢大学医学保健学域医学類 中本安成 先生

9月11日(金)に2年生を対象とした人間科学特別講義が行われました。本校の卒業生である中本先生に未来医療についてお話をいただきました。



○ 今回の講義で中本先生から、現在大学病院で行っている研究や、最先端のガン治療の話など、興味深い話をたくさんいただきました。最近よく話題になる「C型肝炎」から肝ガンになることを知りとても驚きました。肝臓はガンになっても症状が出にくいと言われていますが、そのように発見が難しいだけでなく、再発もしやすいガンだと聞いて、恐ろしいガンだと思いました。

しかし、現在は治療法の研究も進んでいて、様々な方法があり、私は抗ガン剤くらいしか知らなかったもので、とても勉強になりました。肝臓の炎症がガンの悪化を引き起こすということや、その炎症は免疫の機能で起きていることなどがよくわかりました。

先生が研究している治療法は、樹状細胞を用いた免疫医療で、免疫のしくみをうまく利用し、二次反応の効果でガンの再発を防ぐことなどを知り感動しました。将来ガン細胞の増殖を自らの免疫機能だけで阻止できるようになったらいいなと思いました。

また、現在の医療の課題、未来医療への希望なども聞きました。医療技術が進んでいく中で、何のための医療か、ということを医療関係の人は忘れないで欲しいし、現代の医療の問題（臓器移植、安楽死など）を私たちももっと考える必要があると思いました。

○ 現在の先端医療よりもさらに先進医療であるものを未来医療というが、そこに、技術革新と生命倫理の問題があるということが今回の講義でわかった。また、今までは、様々な医療技術を駆使して人間の命を守り、生を延長すること（ライフエクステンション）は人を幸せにする良いことだと思っていたが、それによって子孫が生まれて進化が遅れるということが生じたり、年少者の成長が遅れたりすることがあるマイナス面の考えを聞いて、今までに思ってもみなかった考えに驚いた。しかし、年少者は年長者からたくさんのことを学ぶことができるので、私はやはり医療は大切だと思った。

もう1つ印象に残ったことで、病気を川の流に例え、段差で流れが速まった川、つまり病状が悪化する状況にどう対処すればよいかという話があった。単純に川の流れを止めてしまえばよいと考えるのでは、水があふれたり、下流が水不足になったりと副作用が出てしまうから、川の段差をうめてしまえばよいということであった。私はその発想が思いつかなかったので、「なるほど」と思った。中本先生は、ノーベル賞をとる人間も小学生と同じような発想なのだが、証明を積み重ねられるかどうかは違っているとおっしゃった。



また、マイクロアレイは、印刷機の技術を応用したもので、私たちの身の回りのものがヒントになっている。医療に限らず、他の分野の学問も発明も発想が大事だと思った。だから、何かにこだわったりするのではなく、頭をやわらかくして考えないといけないと感じた。今回の講義でいろいろなことが学べたのでとても良かった。

○ 中本先生の講義を聞いて、初めはよくわからないだろうなと思っていたが、話を聞くととてもおもしろくて医学により興味を持つことができました。英語の授業で「メンタルブロック」という話を勉強して何事も当たり前前に考えていることで、新しいものは何も生まれてこないということが分かりました。医学に関しても結構それと似ているなと感じました。「岩を取り除く」という単純な答えを始めはなかなか浮かび上がらなくて、どうしたら問題なく水を（川の）最後まで通常通り流すことができるのかと悩みました。しかし、原点に戻ってただ水がはねるのを防げばいいという答えがでたので結構自分でもびっくりしました。

癌の病気というのはやはり死因でも多く、特に消化器部では多いようです。この癌がどうして白いのかという質問に私はとてもひっかかりました。しっかりした説明でぜひ分かりたいと思いました。基本、口内炎やできものというのは目立つようになっており、人間の注意のようなものを伝えているものは見やすくなるような性質があるような気がしました。

なんといってもやはり医療の話の話を聞いているだけで、楽しく興味がわいてきます。また医療は次々に進化していき、未来への医療は今では考えられない方法が考えられていくと思います。あまりいい言い方ではないですが、今その失敗を利用し、新しい医療の一步として役立てていくことができるようになればいいと思います。

○ 講義の演題にある未来医療という語にあまり実感がわからない状態で今回の講義に臨んだが、やはりなんとなくわからないままで終わってしまった様な気がする。

講師の先生がおっしゃるには、未来医療とは、現状の先端医療よりもさらに先を目指す医療だということだそうなのだが、それと倫理性というものが、どうからんでくるか、あまりよく分からなかった。しかし、ライフエクステンションや白血球医療の話の中で、技術的に可能でぜひ医療として日常の中に取り入れていけばいいと思われるものがあった。一方、技術としては申し分ないのだが、やはり物質的な問題で、それを日常の中に取り入れることが懸念されるもの、もしくは人間の命を扱う上で好ましくはないのでは・・・と思われるものもあった。特に最後に述べられたものなどは、今日の講義の主題に直結するものでもあり、倫理性とはこういうものなのかなと、少し分かった様な気もした。

心理面の問題は、色々と繊細な問題を含んでいることが多く、よく考えながら、医療技術と向き合っていく必要があると感じた。

○ まず驚いたのが、他の病気の患者は年々減少しているのに、がんの患者だけは増加しているという事実である。さらに1度がんを発病すると、再発の可能性がある、その回数に応じて寿命が短くなっていくということにも驚いた。今までがんがどういうものなのか詳しく知らず、今回の講義でその恐ろしさを実感した。このがんを治療することを可能にしつつあるのが、樹状細胞と呼ばれる他のリンパ球に対して、指令者的な役割をする細胞を使った免疫療法である。他の治療に比べて再発の可能性は低くなるが、それでも再発の可能性は年々上がっていく。しかも発病した部位によって細胞を変えなければならないという欠点もある。この欠点を解消していくために、トランスレーショナルリサーチと呼ばれるもので有効性・安全性を確認していくことや他の企業の協力が必要である。

このような医療の発達で寿命は伸びていくだろう。だが、死期を迎えた人の寿命を無理に伸ばすことが、医療の本当の仕事なのであろうか。自分はそう思わない。

○ 今回の講義で、医療の難しさ、さらにはジレンマというものを深く感じた。医療という学問・職業は自然治癒し得ない怪我や病を持った者を救うことが最大の目的だ。要は、人間の寿命を延ばすことである。しかし、寿命を延ばし続けることで、今ある社会基盤の崩壊を招いたり、人口が減らないことにより「個人」を生かしても「人類」を滅びの道へと導いてしまうことになるのだと知った。

また、医療における倫理性は、そこだけに止まらない。現代医療は単に寿命の延長ということだけではなく、生命を好きなだけ保存し、また簡単に生み出すことを可能とした。DNAの冷凍保存、クローン技術、人工授精、どれも医療に端を発するものだ。中本先生は肝臓専門の先生だったので、その辺りのお話は詳しく聞くことはできなかったが、今回の講義を通して、医療の倫理性というものを、しっかり考えていかなければならないと感じた。

総括して、医療に携わる者が必ず持つべき規範というのが分かってきた。それは生命を決して軽んじてはならないという事だ。現代の技術は我々のあずかり知らぬ生命の深奥を暴きだしているが、それにおごり高ぶってはいけけない。その技術の向こう側にあるのが、患者さんの笑顔なのか否かという、見定めをしっかりしなければいけないのだなと分かった。

